

待つて日本の占領環境を確かめた上、身の振り方を考えることとし、四月ごろ日本本土である佐世保港に上陸。米軍施設に二十日余り逗留し、兵用バックいっぱいの贈り物を詰め込み、日当として三十ドルの大枚を支給され、だぶだぶのお古の背広を着こんで引揚援護局へ足を運んだ。

【執筆者の横顔】

古路さんは昭和三年仙台で生まれたが、父に第二師団軍属として渡満、その後退職し、奉天の麦酒会社で勤務することになったので、昭和十年、家族全員で渡満。小学校に入り、十五年奉天商業学校に進学した。奉天商業一・二年のころ、放課後満人露店商の所に立寄り満州語を習得していた。

昭和十八年のある日学校より突然両親に呼び出しがあり、その満州語を生かすために学校から推薦するが志願兵に進まないかと説得され、学業半ばであったが応じ、特務教育隊に入隊錬成中であつた。

戦後、ソ連進攻の際一時ソ連軍と共にシベリアに行

つたが、間もなく満州に戻り、昭和二十一年春、中華民國新編第一軍に在籍しハルビン地区日僑難民送還業務の工作員として裏作業を推進した。一般引揚者がいかにして、一日も早く引き揚げられるか、引揚げ道中のトラブルに腹を立てていたが、その裏で引揚げ業務を円滑に進めるために古路さんたちが日夜東奔西走並々ならぬ努力が あつたことを知らされた。

(社)岐阜県引揚者団体連合会

理事長 川村 一正

岐阜県送出第七次満蒙開拓

青少年義勇軍

田中中隊の一員として

愛知県 林 修 三(旧姓三宅)

ハルビン訓練所

昭和十九年(一九四四年)六月、満州の遅い春も一足飛びに夏が来て、渡満二度目の種まきや植え付けも

終わり、日一日とすさまじい勢いで作物の成長は進んでいた。来る軍の村作り移行についてもすべて自分たちで衣食住が賄えるよう特殊技能を習得するため、經理、衛生、郵政事務、蹄鉄、農事、畜産、栄養、教練、建築、鍛工など、あらゆる分野に特技生を派遣し、着着とその成果を上げつつあった。しかるに戦局はますます危急を告げ、我が方に利あらず、ついに、我々は住み馴れた訓練所、最小限度五十人の同志を残し、鍛持っ手にハンマーを握るべく戦時勤労挺身隊として、初回次回合わせて百五十人が奉天市（現瀋陽市）の満州車両株式会社に派遣されたのである。

満州車両株式会社

会社は汽車（機関車、客室、貨車など）の製造と修理のための工場であった。従業員は二千人ほどいたようであるが、日本人と満州人（中国人）の割合は日本人二に対し満州人八若しくは三対七ぐらいのところだったらしいが我が軍の戦局が悪化するにつれ、満州人はほとんどん退社していき、我ら義勇軍の応援が不可欠となったのである。汽車が重要軍需品と呼ばれたゆえ

んは言うまでもなく、軍需品の輸送手段に必要だったからである。

入社後、直ちに各職場に配置が決まり、一夜漬にして仕事に取り掛かった。満州人は日ごとに横柄になり、日本人の目の届かないところでは仕事も放棄に近かった。そんなとき、八月九日ソ連は日本に対し一方的に不可侵条約を破棄し、直ちにソ連国境を突破して南下を始めたとの情報が入った。そのころ、満州人は三々五々に集まっては、ひそひそ話を始めた。日本は間もなく負けると言うのである。我々は日本が負けると言った満州人を捜し出し徹底的に打ちのめした。しかし、満州人は強情にも薄ら笑いをしており何とも無気味であった。鍛工場では機関車よりも鎗しやうの穂先作りの方が優先するようになり、会社前の道路ではソ連軍の戦車の進攻を阻止するため随所に深い戦車壕が夜、昼なく掘られていった。いつでも来いと緊迫した雰囲気であった。毎日容赦なく照りつける灼熱の太陽は鉄をも溶かす勢いであった。いよいよ明日は重大放送があると報道された。本土決戦を控えて激励のお言葉である

う「だれもがそう決めていた。

敗戦

八月十五日正午、重大放送を聞こうと私は職場である鑄鋼の事務所の下で耳を澄ませた。玉音放送があると言う。しかし雑音が多くてよく聞き取れない。焦る焦る。「忍び難きを忍び、耐え難きを耐えて」そんな言葉が聞こえたような気がしたが、もちろん何のことだかさっぱり分からない。付近に満州人の姿も見当らなかつた。訳も分からずにボサツとしていると二階の事務所から会社の幹部が下りて来て、「日本は無条件降伏したらしい」と言った。「無条件降伏って何だ」私たちは初めて聞く言葉に戸惑った。しかし、字に書いて見ればすぐ分かる。「何の条件も付けず負けました。貴方のよいようにしてください」と言うことである。あちこちで日本人同志が話し合っている。満州人たちはこそこそと帰りかけた。日本人の男性はすべて去勢され奴隷に、女は娼婦にされてしまうと言う話が出てがく然とし、義勇軍の同志で陸続きのヨーロッパへでも逃げようかと真剣に話し合った。そんなとき、

中隊長は宿舍前の広場に全員を集め訓示した。

「日本は負けた。これから大変なことになる。今からわしの言うことをよう聞いて間違いのないようにしてもらいたい。まずは金のことだ。第一次世界大戦に負けたドイツでは金の価値がなくなつて紙幣はほご、屎も拭けなかつたと聞く。ところが物の値打ちは変わらない。金よりも物を持って。物を売つてはいかん。また、買いいいをして体をこわしてはならん。周囲は敵ばかりで物騒だ。絶対に単独行動をせんようにくれぐれも注意すること」と。

八月十八日午後、ソ連兵が戦車を先頭に中空目掛けて威嚇発砲しながら進駐して来る。将校どもは、まだしも兵に至つては頭は丸坊主、服は泥と油で汚れ、肌れよれの色さまざま、年寄りもいれば少年もいる。肌の白い奴。黄色い奴。赤い奴。黒い奴と種々雑多である。将校以外は囚人であつたというわさであつた。その証拠に教養がなく、算数ができないので四列縦隊で五、六列並べばもう数えられない。二列か一列に並べせて一人ずつ数えるというやり方であつた。また、

時計や万年筆を極端に欲しがり、日本人と見ると捕まえて腕をまくり時計を物色するのである。こうして略奪した腕時計を多い奴は手首から腕のつけ根まで付けていた。

しかも、三日も経って動かなくなると手真似で「直せ」と言つて持つて来る。後向きになつてソ連兵から見えないように竜頭りゅうづを巻いてやると動き出し、「ハラシヨ」と言つて喜んで帰つて行く。自転車などハンドルとブレーキを一緒に握りしめ、動かないので、「二エツト ハラシヨ」と怒っている。

敗戦後、二、三日は無気味に静かな日が続いたが、俗にいう嵐の前の静けさであつた。八月十九日夕方から会社周辺にただならぬ気配が立ち込めた。あちこちで銃声が響き、手榴弾がさく裂し罵声上がる。前日偽八路軍が日本軍の武装解除に来たといううわさがあったが、どうやら暴民が武器を手に入れたようだ。不穏な雰囲気が高まる中で会社の社宅は高塚が補強され、家族全員が会社内に避難した。我々義勇隊員は独り身の気易さから会社社宅を守るため中隊宿舍か

ら派遣された。塀から内部をのぞかれないよう要所、要所に高みを設け、警戒に当たつたが、中国人どもは初めて持った武器を試して見たいのかとところかまわずぶつ放した。それに刺激されてか小孩しょうがいまでが拳銃に赤色の房を付け笑いながら罵声と共に撃ち込んでくるのである。周囲数キロもあるこの困いの中で一晩中あちらこちらと小ぜり合いがあり、これが数日続くとさすがの義勇隊員も少々疲れた。後日談によればこのとき、隣接する満州鉄道の社宅では偽八路軍が入り男全部を強制連行し、そのすきに略奪に入つた。残つていた婦女子は我が身を守るため、十数人が頭髮に入れていた青酸加里を飲み自殺した。これを火葬にする煙が終日上がつていた。思えば当社で義勇隊員の活躍もあつて、この暴動から人命と財産を守り、被害最小限に止め得たことを無上の喜びとするものである。

九月に入り暴動もようやく鎮静する。半ばを過ぎるころからソ連軍の使役に行く者が現れた。裏の旧日本軍の倉庫から食糧、衣料、皮革類などを貨車に積み込む作業である。一日働く帰りには持てる程度の物資

を労働賃としてくれるのである。この話は一晚にして会社中に広まった。希望者が殺到した。倉庫内で食べる程度のことにはソ連兵も黙認してくれたが、ソ連兵の指示を無視したり逃げたりした場合は、容赦なく自動小銃（マンドリン）で射殺した。会社の食堂に高木という少し剽軽な四十前後の人がいてやはりこの話を聞き勝手に使役に加わった。

彼は被服倉庫に入り仕事もせず下着類を十何枚も手に着け、更にその上に軍服と重ね軍靴を履き、更に手に持てるだけの物を持って塀をよじ登って逃げようとした。それをソ連兵に見付かつて有無を言わず射殺された。次の日もまた、その次の日も使役志望者はふえるばかり。昨日あんなことがあり中隊長が気が気ではない。行ったことのない連中は殺されてもよいから軍靴が欲しいと言う始末、ついに行つたことのない連中はかり集められ、これが最後と出掛けて行つた。乾燥味噌乾燥野菜などは初めて見る物で珍しかった。缶詰など保存食、乾パンなどの携行食も山のように積み上げてあつた。しばらくはお目にかかつていない砂糖、

羊羹などもいくらでもあつた。牛の原料となる皮なども何千何万と積んであるのを無表情で貨車に積み込んだ。帰りには想像以上の物資をくれたので、中隊に持ち帰り皆で分配する。このころより会社はソ連が接收し、その管理下で機関車貨車生産にノルマがかけられる。私は親友、船戸錠太郎君と共に会社の鑄鋼工場木工部に籍を置いていた。機関車の鑄物部分の木型を作り鑄鉄、鑄鋼工場に送り込むところではその木型を使って車輪とかブレーキとかの型を取り、これに熔鋼熔鉄を流し込んでできた製品を旋盤などへ送るのである。鑄鋼工場の隣には鑄鉄工場があつて、そこには親友、堀勝巳君がいた。三人はよく気が合つていつも行動を共にした。特に敗戦後はいつも運命を共にするつもりで、お互いに励まし合い慰め合つてきたのであるが、引揚げ後は故里が離れ過ぎ、お互い家業に忙殺され、船戸家、堀家には一度だけお邪魔したのみである。話が先に進んでしまつたが、そもそも木工部は小じんまりした職場で、親友が広島県安芸出身の佐々木栄太郎さん、それに長野県下伊奈郡出身の今牧平和技師

であつた。二人ともまれに見るやさしい人で、今日、私が無事こうして暮らしているのも、敗戦の動乱期に私たちを安全な職場内にかくまっていたいただいたお陰と今もって感謝している。

職場は木造の半二階建て二百平方メートルほどの建物と同じく木造の百平方メートルほどの平家建て一棟、ほかの職場に比較すれば至つて小さな狭い所であつたが、そのほとんどが倉庫で長年来の機関車などの木型がぎつしり詰まつていた。残り部分は木型を作るための材料木が山と積み上げてあつた。その仕事場の一隅に縦横二メートル高さ二メートルほどの鉄製の乾燥室があり、親方と今牧技師は私どもがここに寝泊まりすることを許可してくださつた。「ただし、だれにも内緒だぞ」と厳しく言い渡された。そのときは何も分からなかつたが、後から気が付いていると助けになつたと感謝した。要するにどこからも全く干渉されない隠れ家だったのである。乾燥室の中段に棚を作り二人が上に一人が下にごろ寝した。

このころ巷にまん延したものに疥癬がある。内肢の

辺り、指と指の間など柔らかそうな所に、だにによつて起る伝染性皮膚病でこれが痒いわ痒いわ掻いたらたまらない。そこから膿が出てどんどんまん延していく。掻きむしると今度は赤く腫れ上がり痛い痛い。内肢にでもできようものならゴリラでも歩くように尻を落として足が互いに擦れ合わないように歩かなくてはならない。想像しただけでもこっけいであるが、とても笑い事ではない。私たち三人も御多分に漏れず感染してこの治療に専念したが、容易に治癒するようなものではなかつた。工場から硫黄を掠めるとこれを碎き、鉄鍋に入れて湯を差し、じつくり煮てその汁を患部に塗り付けるのである。

「船戸、疥癬は二十年や三十年では治らんそうやぞ」

「病気の治りが早いか、自分の命の灯の消えるのが早いか分からんなあ」

「嫁さんのきてがあるやろうか」

「だれでもええ、来てくれる人があつたら大事にせにやあいかなあ」

「ところで堀は内地へ帰ったら何をやるつもりだ」

「分らんなあ、三宅お前は何をやるんや」

「帰って見にやあ分からんなあ」

船戸が小学唱歌「村祭り」を歌い出した。二人ともこれに合わせた。「故郷」も歌った。歌声は次第にかすれていった。それからまた、故郷の話になった。次から次へと入れ代わり立ち代わり夜の白むのも忘れて語り合った。本当に日本へ帰れるのであろうか。

九月を過ぎて十月に入ると急速に寒気が骨身に染みるようになる。会社の外へ出て見た。ほこりっほい大通りを北満方面から南下して来たものか骨と皮になった幾人かが、夢遊病者のようにとぼとぼと歩いて行く。目は大きく落ちくぼんで、その瞳孔は玉子が入るほどにくぼんでいる。男装しているが女であろう。胸のわずかな膨らみがそれを教える。あの人たちは、程なく倒れてしまうであろうと思うそんな歩き方である。さすがに老人や子供はいないから、最初の犠牲者は老人や子供であることを物語っている。あの人たちはどこへ行ったか。

更に月日は流れて十一月ともなれば、朝晩の気温も

氷点下をかなり下がるようになった。

北満から逃避行してきた人たちが最後の力を振り絞って南満へ南満へと流れて来る。寒気はますます厳しくなるのに反比例して、服装はだんだんみすばらしくなる。腰に一枚の擦り切れかかった南京袋を巻いているだけである。知らぬ間に避難民の数は日増しに多くなり、夏に掘った戦車壕に老人や子供と覚しき裸体が投げ込まれるようになった。それから更に厳寒期を迎えて「ろう細工」になったように死体を中国人が数頭立ての台車に幾体か積み上げ荒縄でこれを縛り「去!!去!!と叫びながらどことなく運び行く様はこの世のものとも思われず、見る人をして思わず「南無阿弥陀仏」と念ぜずにはおれなかつた。

ある者は天高く空をつかみ、あるいは、ぐつとあるぬ方をにらんだまま、力なくうなだれたまま、乳房をつかまえばかりの乳幼児の遺体。怨念のこもったこれらの亡骸は声がないままにすさまじい勢いで迫ってくるものがある。そして何かを訴えようとしていた。背筋が寒くなる。

奉天（瀋陽）市の戦車壕の堀は皮肉にも自分たちで掘った墓穴となり、一冬にして死体で埋め尽くされてしまったのである。

一 満州車両株式会社は九月二十日ごろ、正式にソ連の管理下に置かれていたが、課せられたノルマは予想以上に厳しいものであり、月末近くになると月のノルマが容易に達成できず、徹夜が幾日か続くこともしばしばであった。また、ノルマが達成できなければ給金ももらえないので、何としても頑張らなくてはならなかった。殊にこの年の暮れ十二月には一層厳しいノルマが課せられ、正月もないぞと皆必死で頑張った。大晦日も近づいてきた二十八日ごろからは徹夜徹夜の連続であった。互いに見合わず友や職場の人々の目だけがざらざら光り異様であった。皆憔悴し切っていた。こうして明日はいよいよ正月だという日の夜遅く目的を達成したのである。我々は感極まって互いに抱き合い万歳を連呼した。深夜の工場にその声は大きく響き渡った。ソ連の管理者も「よくやった、よくやった」と大喜びで正月三日間の休暇を許可するとともにいつ

もより多目の給金と食糧の加配を認めてくれた。敗戦国民として食糧事情は全く悪く、戦後一年間は一粒の米も、そして肉、魚も口にすることはできなかった。来る日も来る日も皮の十分取れていない高粱こうりやんか、粟が食べられるときは御馳走であった。菜はといえば、いつもこの高粱飯に塩水に色を付けたような味噌汁に馬鈴薯か、菜っ葉が具として入ったものをぶつ掛けただけであるので、我々は腹の中がガサガサになり、便が出ず、痔に悩む者も続出した。食い盛りの若者のこと二人寄れば食べ物の話ばかり。「銀飯が食いたいなあ」「肉が食いたいなあ」「今、白い飯が腹一杯食えたら死んでもええ」、本当に蛇でも鼠でも蛙でも見つけたら奪い合いになるところであろうが、そんな物は見掛けることはなかった。せめて話し合うことで気を紛らわしていたのである。

ソ連は、我々日本人を徹底的に酷使し、機関車や貨車を増産させ、これに日本人を使役に旧日本軍の軍需物資を山と積み込ませ、来る日も来る日も北満州からウラジオストク方面へ送り込んだのである。これを

中国人たちはどんな眼差しで見ているのか、怒り心頭に発していたようである。少々教養のある中国人が言った。「あれは日本人の物である。わずか十日足らずの参戦でソ連が戦勝国面（すゝ）して自国へ物資を運ぶのは略奪と同じでそのやり方が汚い」と。シベリアへ送られた旧日本兵は北滿州からモスクワまで、列車が通るよう鉄路の敷設に酷寒の中、命をかけて強制労働させられたのである。

昭和二十年も暮れ、明くれば昭和二十一年、今年こそ祖国へ帰れるだろうか。だれもが神に祈る気持ちでその報を待った。ただひたすら耐えてじっと待つだけである。そしてその年三月には満州車両株式会社は、ソ連の管理下から中国側に引き渡される。翌四月、中国は大整理を行い、我ら義勇隊員全員を解雇する。その理由は中国では満十七歳未満の者は働かせないというのである。ただし住居は帰国するまで今のままでよいと言うことであった。敗戦の日までは中国人部落の内にあった満人勤報隊の宿舍が与えられた。案内されて行つて見ると驚いた。部屋の中には何も無い。薄暗

い家の中は細長く、真ん中に棟の端から端まで縦に土間通路が貫き、その両側に葦で編んだ固いアンペラが一枚敷いてあるだけの極めて殺風景なものであるが、敗戦国民は、この際文句を言っている立場ではない。雨露と少しでも寒さがしのげれば良しとしなければならぬ。

私たちは数人でここをねぐらとし、食わんがために即刻、職探しに行かなければならない。私たち数人以外の者は思い思いに中国人の家に住み込みで働きに行つた者が多い。歩いていると隊員にも時々会い、情報交換もできた。働かざるもの食うべからずで、その日に仕事に有り付かねば金銭もなく食わずにいるより仕方がない。一日を一丁五円の豆腐で過ごしたことも度々であった。次第に体力が衰えきつい仕事はできないようになる。これではそのうち倒れてしまうと考え、会社の門で守備をしているソ連兵を一生懸命おだて上げ、忘れ物をしたからと会社に入れてもらった。寝泊まりしていた木工場の窓に縦横二メートルほどの羅紗地らしいカーテンが木型に直射日光が当たらないよう

に掛けてあった。これを持ち出そうと言うのである。

私と船戸はこれを三十センチ幅ぐらいたたみ、息を深く吸い込んで腹を小さくし、固くきつく腹から胸の辺りまで巻き込んだ。息が止まるほど苦しく首の辺りに静脈が飛び出るほど声を出すのもおつくうであった。私はやせていたのでその上から上衣を着ると怪し気ながらも何とかごまかした。船戸は太っているので、とても服のボタンも掛けられなくなってしまっているので、くあきらめ、帰りに門を出るとき、ソ連兵の目をうまくそらさせるよう頼んだ。会社から物を持ち出させないために入るときより出るときの方が厳しいのは当然のことである。全く薄氷を踏む思いであった。船戸は入るときにおだてた若いソ連兵に近付き陽気な声で「ウロスキー、ハラシヨ」と、右手を上げた若いソ連兵はにこにこ顔で「ヤポンスキーハラシヨ」と悦に入っている。私は苦しい息を我慢して平静を装い、精一杯愛想笑いをした。若い兵は手で外に出てもよいと合図した。私は冷汗をかきながら門をくぐったが船戸はずうずうしく件の兵の手を握り、日本語で左手の飯盒

を示し、これを忘れたのだとしゃべっている。私は苦しくてたまらず先に歩き出した。船戸の演出は大成功で、その度胸には頭が下がった。宿舎まで帰ると早速カーテンを取り人心地が付いたところでやって二人で大笑いした。

早速に中国人宅に売りに行くと最初の家でもう飛び付いてきた。よほどこの生地が欲しかったとみえ、いくらだと言う。しめたと思いい、山を張って「八百円だ」と言う少し考えていたが「高い」と言う。六百円以下では駄目だと言うと、「六百魂銭、好!!、我的買」と言う。六百円を受け取ると脱兎のごとく逃げ出した。「もうないのか」と言う声を背中に聞きながら。後で気が付いたことであつたが、支那服を作るのにちょうど良い生地であつたなあと思った。

早速に屋台市場に行き、最も美味とされるなつめ入り粟餅を買って船戸と二人で腹いっぱい食べた。甘酸っぱく餅々した歯ごたえがたまらなく、この世にこんなにもうまいものがあつたのかと有頂天であつた。一日、一生懸命、驢馬の代わりに働いてやっと二十五円か、

三十円の報酬であった時代である。しかし悪銭身に付かず残金の四百円ほどは宿舍内に隠して置いて盗まれてしまった。明日からまた働かねばならなかった。

仕事、即、食事であればまずは仕事に有り付くことである。朝は夜の明けのを待つてだれよりも先に中国人部落へ急ぐ、運良く仕事に雇ってもらえれば、一日中、一生懸命働いて夜星をいただいて帰る。月や星を見れば故郷でも同じ月や星を眺めているだろうと思いが詰まる。飛ぶ鳥を見れば、自分にあんな翼があったならとしみじみ思う。宿舍に帰れば一日の疲れが出て、友と語らう気力も無い。暗い舎内で皆無口になり着のみのまま、各自勝手にごろりと横になり眠るだけの実に味気無い毎日が何日続いたことであろう。同志同胞でありながら「隣は何をする人ぞ」そんなことを考える余裕もなかった。

暗闇の中で人の気配がすると「だれか帰つて来たな」と感ずるだけ。そんな殺伐たる雰囲気の中である夜、私の近くで寝ているだれかがいきなり抱き付くような格好で近付いて来たので気味が悪くなった。宿舍

内は隔壁なしの鰻の寝床であるので、そのままごろりと二回ほど寝返りをして離れたつもりで寝ていた。それからまた、眠ったことであろうか。また、私の体の上に腕と足を乗せて来たので苦しくて目が覚めた。仕方なく手で払いのけ「寝相の悪い奴だな」と思いながら寝ていると、今度は何とも奇妙な声で、「ああ」とも「うう」とも聞きとれるような表現でまた抱き付いてきた。「こいつ、春期発情期の兆候でもあるのか」と余りにもしつこく、うるさいので、「うるさい奴ぢやな。もつと向こうに行って寝ろ」としかつてそのまま深く寝込んでしまった。

翌朝、顔に冷気を感じ目を覚ますとだれかが、私の顔に顔をくつつけるようにして寝ているのでびっくりして飛び起きてよく確かめるとそれは佐藤君であった。昨夜のこともあり気味が悪かったが、異常な体の冷たさから変に思い、「おい、佐藤君」と呼んだが返事がない。手で体を揺らそうと肩の辺りにさわってびっくり。冷たくなっていて硬直していた。私は慌てて皆を叩き起こした。急に昨夜の私の彼にとつた対応が悔や

まれた。知らなかったとは言え、本当に申し訳ないことをしたものだ。ふだんは口数も少なく友達も限られていた佐藤君であったが、そんな彼が息苦しい中から最後の力をふりしぼって、きつと何か聞いてもらいたかったに相違ない。それなのに私は彼の心も読み取れず、情無くも、「向こうへ行け」としかつただけだった。「許してくれ!!佐藤君」彼は故郷を遠く離れた満州で身内はおろか同胞にさえ看取られることなく若冠十六歳で二度と帰らぬ人となつてしまった。私があるときに、「おい佐藤君、どうしたしつかりしろ」と抱きしめてやったら彼の人生はまた変わっていたかも知れぬ。今はただ、心から佐藤君のご冥福を祈るのみである。

引揚げ

昭和二十一年五月上旬、内地引揚げのうわさが流れる。またデマか、にわか信じ難い。しかし、程なくして中隊長から正式にこの話があつて、皆飛び上がって喜ぶ。中隊長は奉天市内の中国人の家に住み込んで働きに出ている隊員に一刻も早く知らせ、連れて来い

と檄を飛ばす。我々は相談して帰国に必要な十日以上の携行食料を考えることにする。小麦粉に塩を入れて固く練り、とろ火で気長に焼いた物(ウ)が一番長持ちするのではないかと言ふことになつたが、会社でも家族持ちで金を貯め込んでいる連中はパンの芯に宝石を入れたり金を入れたりしていると言ふうわさが飛んだ。すると今度は、日本へ持つて帰れる金は一人当たり千円、金銀宝石など貴金属は駄目、衣類食料などは一つにまとめて一人一個までと触れが回つた。これに一人でも違反すると連帯責任でその一団は帰国させないとのことであつた。ことに家族持ちは女、子供のことが最も気掛かりで引揚げ日が決定し、その日が日一日と近付くとついに我々単身の義勇隊員にその加護を依頼するようになった。一人がそれをやると皆一斉にこれを実似た。私も縁もない多治見出身の船戸鐵丸一家の加護を頼まれた。食料と若干の金銭は面倒をましようと言ふことになつた。

六月十五日いよいよ奉天から引揚者としての一歩が始まる。船戸家は老夫婦と私より四つほど年上の娘さ

んと二つほど年上の娘さんの四人家族であった。二日ほど北奉天の収容所で宿泊させられ、六月十七日夕刻、北奉天駅を出発する。列車は貨物の無蓋車で日本の貨物車よりは大きい、一両に二百人近くも乗せられ、荷物を持つと立錫の余地も無いので荷物を床面に敷き詰め、その上に腰を下ろすようにした。長旅は年寄り子供にはつらく、横にしてやるために、ついに我々若い者は立ったままの列車旅となった。列車は駅でもない所に時々止まる。何だろうとのぞいて見ると列車を止めた中国人と機関士が何か話し合っている。どうやら強請しているらしい。いくらかの金を皆で工面し、再び錦州目指して走り出す。また停車する、今度は中国人がバケツにくんだ水を売りにきている。一眺千里のこの辺りでは飲み水がありそうにも思えない。よく見るとたんぼの稲の陰で汲んでいる。そんな物を飲んだらどうなることやら。桑原桑原くわはらくわはら。また急に止まる。貨車には便所がないので、機関士に金をやり十分ほど休憩して高い貨車から草むらに降り、用を足すのである。老人、婦女子の苦勞やいかに、我々はどこでも平

気。だが娘さんたちは全くかわいそうであった。短時間には何千人もの人が用を足すのであるから恥も外聞もない。男も女もない。しかし、気恥ずかしい娘となる。とそうはいかない。私は船戸の老夫婦に頼まれて二人の娘さんのために毛布を一枚持って行き手でぶら下げ、衝立代わりとし、二人の面倒をみさせられた。その後、列車の進行中急に尿意を催した夫人が辛抱できず、勇敢にも貨車をよじ登り貨車と貨車の連結器の所で用を足そうとしたとき、列車の揺れで振り落とされ、悲鳴とともに姿が消えた。そのような出来事もあった。艱難辛苦の末、錦州を経由して乗船地、コロ島にたどり着いたのである。海の青さが目に染みる。二年振りに見る海の色と潮の香りだ。この海が日本に続いているのかと思うと胸が痛くなる。よくぞここまでたどり着いたものと感無量になる。船に乗ってしまえばこっちのものだ。もうどこへ連れられて行くこともあるまい。もう少しの辛抱だ無事に過ぎてくれ、そんなことばかり考えていた。もう荷物も要らん、金も要らん。一刻も早く船に乗って祖国日本へ帰りた。

いよいよ乗船の時はきた。埠頭から棧橋を上れば何隻かのアメリカ軍上陸用舟艇が岩壁に横付けされて、我々を待つていてくれた。中国とは違つて持物検査は比較的簡単であつたが、シラミなど害虫と伝染病に対する消毒は徹底であつた。DDT粉末剤を頭から全身くまなく噴射され、顔から耳鼻、禪の中まで真っ白になつた。何をされても苦にならず、ただ無性に嬉しかつた。こうして無事乗船し、艇は静かに港を離れた。

「満州よさようなら。もう二度と他国には行くまいぞ。だが何と言おうと」私は心に深く誓つた。「国破れて山河在り、人間至るところに青山在り」と言われてもそれは他人事。私は絶対に祖国を離れない。甲板に出て離れ行くコ口島に向かい、「馬鹿野郎、馬鹿野郎」と大声で必死に叫んで見た。隊員が飛んで来て「何だ何だ、どうした」と聞いたが私は何も言わなかつた。ただむやみに涙が後から後から頬を伝つたが、私はぬぐうことさえしなかつた。船中に入ることもなく三日間を甲板で暮らし、波高い玄界灘も苦にならず、ひたすら前方に郷里の島影を求め、にらんでいた。博

多港に上陸したのは郷里を出てから二年四カ月目であつたが、十年も二十年も経つていたような気がした。

【執筆者の横顔】

林修三氏は、岐阜県農家の四男、昭和四年生まれの六十五歳である。昭和十九年、岐阜県土岐郡釜戸国民高等学校を卒業し、同年満州開拓青少年義勇軍内原訓練所に入所して五月にハルビン訓練所に入所。二十年六月ごろから戦局が刻々悪化するにつれて、義勇軍の応援が不可欠となつて、修三氏らは戦時勤労挺身隊として派遣され、奉天満州車両(株)に従事していた。

八月十五日の玉音放送を聞き、信じられない苦惱で号泣した。

ソ連の管理下で修三氏らは鑄物工場木工部に所属し、機関車貨車生産にノルマがかけられる厳しい作業であつたが、幸いに二人の上司がやさしい人であつたので、修三氏も今日生きてこれたのだと、その人柄に深い信頼感を今も抱いている。

昭和二十一年三月、満州車両(株)はソ連の管理下から

中国に引き渡され、四月に義勇隊員全員が解雇された。その後は満州人に雇われ幾ばくかの賃金を受け罵倒されながらも、日本に帰るまでとは、すべてを我慢した。七月、コロ島から乗船し、船は動いた。

引揚げて父の農業を手伝っていたが、二十四年名古屋市消防士を拝命、四十六年に消防士長、五十六年に消防司令補に昇任、六十年に定年退職、その後在任期間の好成績を認められて、名古屋市自主防災組織指導員として平成三年まで勤務した。その後も望まれて、名古屋市中央区栄地下センターに入社して、現在に至っている。

修三氏は敬老の心厚く、同僚から信頼され、後輩をいづくしむ性格であるが、これは満州での二年四カ月、悲喜交々の労苦を体験された際に、自ら鍛えあげた力であろう。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

亡き父の拓魂に学ぶ

愛知県 板倉博明

私の小学校三年生のときでありました。昭和十二年の七月小学校の先生から支那事変の始まったことを知らされ、中国の南京陥落のときは、戦勝を祝して村では提灯行列を行い、出征兵士を歓呼の声で村はずれまで見送った。やがて戦死者の遺骨が白木の箱で村へ帰って来るようになった。日本軍戦勝の声はいつしか消えていき、やがて村には米や物資が不足して統制経済となり、村は疲弊していった。

このころに、日本政府はソ連国境を守り食料増産を計画して黒龍江省一带へ満州開拓者を募集して入植させていた。父は友人の勧めで満州大陸に大きな希望と夢を抱くようになって、満州開拓移民に応募した。そして満州へ現地研修に六か月間行って帰ってきた。父は家族に現地の状況を説明しながら満州へ行くことの